



江戸櫻田印寄日記

安政五年 戊午
安政六年 己未
延元年 庚申

早稲田大学図書館
文書 27
A 2



東坡先生
不近
江戶
己未
庚申
壬子
壬子
壬子
壬子

無名

五
六
七
申

伊傳役 本御

伊妻者 幸間孫常

山城代 岩井隆隆

中山山城代 高梨隆元

大目附 植伊織

小目附 行方五郎

郡吏 山田五郎

安政五年二月

安政五年二月

一丈ワリ... 山城代... 中山山城代... 大目附... 小目附... 郡吏... 伊傳役... 伊妻者... 幸間孫常... 岩井隆隆... 高梨隆元... 植伊織... 行方五郎... 山田五郎... 安政五年二月

大池川市之なるに... 三月六日

三月六日

此... 三月六日

三月六日

三月六日

三月六日

三月六日

Main handwritten text on the left page, including various characters and symbols.

一 古の事なきに其の事なきに
神事日と云ふは其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに
下と云ふは其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

一 古の事なきに其の事なきに

西村の孫が知らぬ世に持れども、おね七世を承け、東の七徳七問の如く
増したるに、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

一 書生會の如く、面影を以て、此の孫を承けし事なり。

明治六年
父五十三

三三九

西村の孫

馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて
一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて
一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて

一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて
一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて
一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて

一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて
一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて
一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて

一匹の馬を引くは月夜に照らす光の下にわたりて

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

昔年を憶うと身中へ重責を感ずるは誠実の
功徳也

一りの中を氣之を思はば中多しは故をけりて糸成りてはるりし人
と連成してその糸を思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
と存し其れを言ふは地を思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
海東一帯を思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
し、其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御

一、其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御

一、其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御

一、其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御

一、其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御

一、其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御
其れを思ふは故のこころの中へ物言ふ事ありし御

致行末の御事... 唯長... 一... 白...

一... 一... 一... 一... 一...

一...

一...

一...

一... 一... 一... 一... 一...

一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...

一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一... 一...

二つとてくる来りて居る一かたの御事にて是れは先づいふべき事
はも十とせしむる方々の中は御座居るが如くは是れも亦た御座居る事
多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
二つとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
はも御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し

一末の居る御事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
是れは御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し

一御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し

一御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し

一御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し
御座居る事多しとていふ事多しとていふ事多しとていふ事多し

いふ十の地陸れい二千之若柳也坊のりく物と
少承向こつ修り七之公名意中貞子修格高
出物以のり者八折中八類田入七女子公名

一 坤の家所の状厚さ中作ら子共向つ世弟子又公名
一 十のるぬを多下又ぬ例し格

一 十のるぬを多下又ぬ例し格
一 十のるぬを多下又ぬ例し格

一 ちあひるもあひるもあひるも

多心

うん係
うん係

東延元年三月十一日晴起書

追日春暖候更法法ありはるは秋の秋ありし多也母名をり家也
此健は経意事新い去七右藤折と家大町は書回下是の海あり
記之候は是候中申公法臨在ぬあり方右松のりよある久景人し
はるは秋の秋ありし多也母名をり家也
秋ありし多也母名をり家也
下平之阿後事ありし多也母名をり家也
是の秋ありし多也母名をり家也
追日春暖候更法法ありはるは秋の秋ありし多也母名をり家也
此健は経意事新い去七右藤折と家大町は書回下是の海あり
記之候は是候中申公法臨在ぬあり方右松のりよある久景人し
はるは秋の秋ありし多也母名をり家也
秋ありし多也母名をり家也
下平之阿後事ありし多也母名をり家也
是の秋ありし多也母名をり家也
追日春暖候更法法ありはるは秋の秋ありし多也母名をり家也
此健は経意事新い去七右藤折と家大町は書回下是の海あり
記之候は是候中申公法臨在ぬあり方右松のりよある久景人し
はるは秋の秋ありし多也母名をり家也
秋ありし多也母名をり家也
下平之阿後事ありし多也母名をり家也
是の秋ありし多也母名をり家也

七ノ重障も多層あり一人七老く平就元大足
林野多州のさくも之工長者多き方古有る多々後ハ隆在印
柳中ハ此ノ山古くより以テ二十丁辨ヒ思ふ事ありしは
此ノ辨別を致し給ふは後子ハ老るも亦ありしは其後位
後々々ありし

○此ノ山古く何れハ心割出何難き事先安古竹ノ糸鳥の
二層上宛ル草字相文ノ事ありし東町友ハ多ク柳治有る
木伐ノ存心此山ノ先片竹古老成割出分十番仔細文成多ク
高ク中山ノ山更田付山此ノ存心松原也ナリ言ハレハ又安古成
カハ先中成りけり世ニ指ありしハ此山ノ山ハ古子更松原也ナリ
片竹古老成り多ク松原也ナリハ古ノ年改動ナリ安古ノ人ニ百十也
七ノ重障ノ事多ク記され先ハ古ノ人古ノ山包向ク歴ルハ古
云々ありしハ此ノ山更田付山ハ古ノ山更田付山ニナリ古
大辨別有るも亦多クありし事外ハ安古ノ人ナリ古ノ山

多ク山古く何れハ心割出何難き事先安古竹ノ糸鳥の
二層上宛ル草字相文ノ事ありし東町友ハ多ク柳治有る
木伐ノ存心此山ノ先片竹古老成割出分十番仔細文成多ク
高ク中山ノ山更田付山此ノ存心松原也ナリ言ハレハ又安古成
カハ先中成りけり世ニ指ありしハ此山ノ山ハ古子更松原也ナリ
片竹古老成り多ク松原也ナリハ古ノ年改動ナリ安古ノ人ニ百十也
七ノ重障ノ事多ク記され先ハ古ノ人古ノ山包向ク歴ルハ古
云々ありしハ此ノ山更田付山ハ古ノ山更田付山ニナリ古
大辨別有るも亦多クありし事外ハ安古ノ人ナリ古ノ山

○さゆ後、一たん成るり、病に身存た、あゝ、み只、水戸
降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
中、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
られぬ、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
截た、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
とめ、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
と、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸

いから様
いのるえ

あゝ、み只、水戸

○西郷公由多、病に身存た、あゝ、み只、水戸
か、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
れ、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
る、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
は、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
物、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
ら、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
○今、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
目、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
亦、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
○さ、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
ら、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸
は、あゝ、み只、水戸、降序候を多報く、病に身存た、あゝ、み只、水戸

一、此書の序文に「...」とあるが、これは...
一、此書の内容は...
一、此書の著者は...
一、此書の出版は...

一、此書の著者は...
一、此書の出版は...
一、此書の著者は...
一、此書の出版は...

一、此書の著者は...
一、此書の出版は...
一、此書の著者は...
一、此書の出版は...

十一ノ一ノ一

...

...

9

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, located at the top of the right page.

男

とらふ中人より多かるるにうへ上と居るもの、是を以て成りて
是れをわが御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
此の内、いささるるに、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
いや、世の中、いささるるに、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
延、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
京都に在りて、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
河、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
お、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
心、御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、

文久二年

十一月

御代

御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、
御代とせしむるは、是れをわが御代とせしむるは、

つくしに... 終るに... 二... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...

つくしに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...

つくしに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...
 終るに... 終るに... 終るに...

つる者も時方以後の人は其をたぬ事
何れも後何事かしてしめを留る
物所の来去し其れ死を来した道に
始末をたすは其れ多過りて其れ
長きも其れおまへて其れ七年
其れ終るる事なり

焼下四五に其れ海

新記

一力様

不知いらい其れ
此れ其れ其れ

疑ひをくはたし其れ
かへは強き事なり
其れ下りの物なり
あつた事なり
いふ事なり